

御堂さん

MIDO^{san}

ギヤツプ感あるある
手紙のチカラ



季節の短歌

ひえびえと朝霧こもる奥^{おく}処にて
銀鈴のひびき一つかなかな

——坪野 哲久

この写真を撮った一九九三年ごろは、仕事がようやく忙しくなって、なんとか食べられるようになりかけていた時期でした。大阪に住み、家のことは妻に任せきり。娘からは、「お父さん、今度いつ来るの?」と聞かれるような生活でした。

一緒に写る娘(当時五歳)は、本当に素直で可愛かった。よく懐いてくれていたんです。でも、思春期に入ってから

だんだん距離を置かれるようになりまして。手もつないでくれません。なのに、自分

ども、思春期に入ってから、なので、僕もそのつもりで勉

ばかりで、父娘関係の難しさを感じているところ。夫婦ともに医者が多い家系



1993年、「さっぽろ雪まつり」での辰巳父娘



強していたのですが、高二の春に観た、つかこうへいさんの舞台『ストリップパー物語』に衝撃を受け、高校、大学と劇団活動に明け暮れていまし

似たものの父娘の進路変更



俳優／近畿大学文芸学部客員教授
辰巳 琢郎
たつみ たくろう

た。卒業と同時にNHKの朝ドラでデビューし、それからずっと、この仕事をしていきます。好きなことを続けられるのは、何よりの幸せだと感謝しかありません。

きた自分としては、許さざるを得ませんでした。

似ているぶん、お互いに反発がすごくあるんです。磁石でいうと、プラスとプラスです。ね。面と向かうと、親の言うことはまず聞きません。仕方ないですね。でも、いろんなことにチャレンジして自分の道を究めてほしい。大変なおペラの世界で大きく羽ばたいてほしいと願っています。

この写真は、こんなころもあつたんだと懐かしく思わせてくれ、父娘関係について初心に帰らせてくれる一枚でもあります。

(談)

たもの父娘なのでしょう。音楽の道に進むことには反対でした。もちろん妻も。家族間で、かなりもめました。でも結局、好きなことをして

辰巳さんプロデュース、本格的な味が楽しめるロゼスパークリングワイン「今様2019」新発売。